

インド -- もう一つの宇宙 (巻頭エッセイ)

著者	藤田 昌久
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	128
ページ	1-1
発行年	2006-05
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005472

藤田昌久

長年の夢がやっと実現した。この二月にアジ研の内川秀二氏に案内してもらって、一〇日間ほどインドを見て回った。ムンバイ到着の翌朝、まず空港近くのスラムに行き、内川氏の知人宅を訪ねた。主人と息子はビル清掃の仕事中とのことで、夫人と娘さんから、チャイをご馳走になりながら話をうかがった。スラムと言っても、電灯もあり、水道も近くにあり、側の小川が下水の役を果たしている。敬虔なヒンズー教徒のお二人の明るい話を聞いているうちに、平均所得が五〇倍以上ある日本の我々がこの人達より本当に幸せと言えるのかな、とふと思った。その後、車で中心街に近づくうちに、突然、青いアラビア海に面した、インドきつての高級住宅街に入り、インドには日本の平均的な我々よりも遙かに富裕な人々も多数いることを実感した。

翌日の夜デリーに到着後、ホテルから歩いてレストランに行く途中、歩道に寝ている人々の多さに驚き、踏み付けないよう歩くのに苦労した。翌朝早く、デリー西北二〇〇キロのパンジヤブ州にある農村調査のため、濃い霧の国道二号線をまっしぐらに走り、昼過ぎに目指す農家に到着した。その農家の庭には、ターバンを巻いた近所の農場経営者が集まっており、農場と一緒に歩きながら話をうかがった。パンジヤブ州はインドきつての穀倉地帯であり、灌漑の行き届いた小麦畑が見渡す限り青々と広がっている。しかし、このインド一豊かな農村にも悩みはある。特に後継者問題。英語教育を受けた富農の子供達はインドの大都市を通り越して、アメリカ、カナダやオーストラリア

に移住したがるとのこと。翌日は一転、デリーの西南二〇〇キロのラージャスタンプ州へ農村調査に行った。この地域は灌漑がほとんど無く、インドでも最も貧しい方の農村である。日本円にして年収三万円に満たない農家の主人と話した。子供は一〇人いるが、いずれもほとんど教育を受けていないので村から出て行けないとのこと。しかし、よくしたもので、この地方の格安の豊富な労働者を目当てに、鉄工所やオートバイなどの工場が近くの町に多数立地してきている。

最後の二日間におけるバンガロールでの山場は、インドのIT産業の旗手であるインフォシスの本拠の訪問であった。一九八一年に七人で創業されたこの会社は、今や全世界に四万五〇〇〇人の従業員を持つ、インド最大のIT企業の一つ。巨大なガラスのピラミッドを中心に七〇エーカーの敷地に広がるキャンパスは、アメリカでも見かけないほどモダンである。現在、インドのIT産業が国のGDPに占める割合は四％であるが、この産業の成功がインド人全体の誇りと自信に与えた影響は計り知れない。

今インドに世界の熱い目が向いている。これは中国に継いで、巨大な労働力と潜在市場を持つ新興経済大国の出現を期待してのことである。しかし、インドの一番の魅力は、とてつもない多様性を秘めたインド文明そのものにある。それは正に一つの宇宙を成している。二一世紀のアジアはASEAN、中国にインドが加わって、益々面白くなる。

(ふじた まさひさ/アジア経済研究所所長)